

コロパンと共に

美しい森、林、緑のじうたん、しきしめられた練兵場。そして、小高い丘のなだらかな斜面に、寝そべった私は、此の広場のすべてを我が物の様に、ふりそく陽の光りをたっぷり受けて、頭の中に凡ゆる夢を可能にしながら、若さを独り楽しんで居た。

見上げる空は晴れ渡り、浮雲が所々、此の春晴に取り残された様に二つ三つ、ふわりふわりとどこかに流れ、果てしない空の青さに、私の夢も限りない。

ふと目に沁みる芝生の上に、ピンクと赤の毛糸の玉がちらみ合って跳びはねている。

二人の小さな女の子と、その二人の若い母親。

ピンクの娘と母親の二組が私で、赤の娘と母親の二組がお隣の佐々木さんの奥さんで有る。

気の合った二組の母親は、持って来た木綿の風呂敷を大きく広げ、其の上にバニエ・水筒を並べ、住居の近くの代々木の原に、下駄の片っぱが引っくり返ってもそのままだに、家庭の苦も忘れ、のんびりとしたひとときをお互いに楽しんでた。

偶然、新世帯同士が隣り合せて「原宿三百十番地」にスタートした。

今でこそ、アメリカ式の家が建ち並ぶワシントンハイツも、その頃は、風の有る日は黄塵の大陸を思わせる様に周囲一丁先迄吹きまくり、人家の窓は赤土がつもると迄云われていた。

天長節の観兵式には、陛下の白馬上の御姿と、立ち並ぶ兵士の様子が、画卷物の様にくり広げられていた頃だ。

果てしない夢を画く私の隣りで、佐々木さんの奥さんも何を考えているのだろうか？

此の静かな美しい原で、目の前の青い木の梢に、可愛く飛び交う鳥の羽ずれに、耳そば立て乍ら、遠いお国の越後の思い出に夢を楽しんでいるのではないか？ 等と勝手に想像して見る。

何事にも最初のスタートは必ずある、我々のスタートには、最高の生活、最大の事業、世界的な記録等は用がなかった。

只、平凡に年をとり、そして、燈火が消える迄、良人や子等と楽しく最後を飾り度いものと新家庭のスタートについて、此の静かなる原で大気を吸い乍ら、お互いに語りあった。

聞き手は原を横切るそよ風丈だが――

一つの門に二軒の家、そして、二組の若夫婦と、一人づつの小さな女の子。正に同じ状態だった。門が開いて足音がすれば、今の音が家か隣りかお互いに良く知っていた。毎朝、表にまるで約束した様に同じ時刻に七輪が持ち出され、両家の主婦が「バタバタ」と火を起し始める。



銀座コロパン本店

佐々木さんのお宅は、香料屋さん故、もす函もふくいくと良い香りがたよう。
家の方は、ひでと云って、荒物屋で一わ二銭のを五わづつ買い込み、隣りに負けずに丹精しながら燃やす。油の様な匂いとお隣りの香り良い煙りと交って、空に仲良く上って行く。

朝の佐々木さんの御主人の仕事は、玄關から座敷のお掃除、家の方と云えば良人の手作りのお風呂場に、良人の大きな声。

「子供が上ったよ」と朝風呂の音が隣りに伝きこえる。流石に佐々木さんでも此の朝風呂には驚いたらしい。

買物も計画的な生活設計を樹てていられる佐々木家と、月給取りが貯金をするなら食わずに貯める」という我が家の家風は、次の月給が入る前の心細さはあるが、お隣り同士の妻達は、亭主の好きな赤烏帽子に無条件で暮らしている。

昼も廻ればお隣りは、ヘラ台を並べて子供をあやしなから、昨日張り終えた布で和裁に余念がない。

そして時間頃になれば、子供を乳母車に乗せて、「お願います」と声をかけて、買い出しに出掛けられる。

私の方は子供と大きな声で歌を唄い乍ら、あやしげな洋裁に、ミシンをガチャガチャと踏んでいる。

御使いも御用聞きが好きで「甘泉堂」の小僧さんが毎日来る程、私は和菓子好きだった。

子供も心得て居て御用聞きが「こんにちは。八百屋です」と云えば、お人形遊びの手を休め「今日はよう御座居ます。ホーレン草を持って来て下さい」と、断りと注文を一絡に、おしゃまな口をきく。

その道具一式は一寸張り込み、床の間の遠川流の活け花も春らしく、今思い出して、其の時の用意は一番楽しかった。型通りの新年の挨拶から始まり、お隣りの親子三人と家の親子三人が、春の一日を楽しく過した。後片付けの洗いの金ふちがとれて居るのに気づいた。さつきお隣りの御嬢さんに渡した時「カチン」と音がした。奥さんが「囁んではいけませんよ」と小さく云われて居たが――

其の後毎年新しい春を迎える度に、そして此の小さな壺を見る度に私はあの年の春を、又小さな「カチン」という音さえ、生き生きと思ひ出されてなつかしさに絶えない。

翌日は我々一家がお隣りを訪問した。借家乍ら御夫婦そろって應をかけた玄關は、美しく光り何処かに田舎の旧家の匂いがたよう様な感じだった。床の間には、日の出に鶴の黒塗りの御盆にたった一つ小さな壺が置かれてあった。

両家の主人達は、お互いに今日は和服姿で妻達もお揃いに結い上げた丸髻の、赤とピンクの手がらもいつもと違った何となく改った様子に、子供達も、矢張り奇麗な赤いおべで、それなりの気取った態度。

昨日と少しも変らぬ姿と、これ又、昨日と寸分違わぬ間取りの家なれど、矢張り昨日と何処となく違つて居た。

室内の家具類も、何でも新しい物を取り入れる和洋せつちの我が家と、何となくどしりとした重みを感じる旧家の匂いを感じさせる佐々木家。同じ丸髻にしても美しの手がらのついた髻には、一本の遅れ毛はなくとも前髪のピンについた自然のウェーブが、といても、すいても波を打

お醤油の香ばしい香りが窓から流れて来ると、間もなく台所で「奥さん焼きましたから」と、お隣りの奥さんの声がかかる。米処に両親を持つお隣りは、カキモチには、ことかかさない。其のお礼には、甘納豆か鹿の子等の餅菓子がお盆に載せられて行く。

夕べの薄闇が降り始めると、先づ先きにお隣りの御主人の御帰館で有る。

門の開く音と、足音で、両家の主婦達は耳ざとくそれが家を隣りかと判別する。

佐々木さんは和服姿に前だれ掛けて、御店の外国香料の外函を丹念に小割りにし、奇麗に束ねて少し宛ぶらさけて帰って来る。

毎日、その下駄音は一定の時間に「カランカラン」と私の耳元に響いて来る。

夜のとばりが降りてしまふと、ハイカラさんの洋服に、靴音をズシンズシンと強く立て乍ら、我が家のパパが御帰館と成る。

食事付の為、御隣りよりおそいが、たまに家で食事する時は、必ずその右手に「肉」の包みが抱えられている。

妻同士が仲良くしているので、自然良人同士も朝の挨拶を交し、話し合う様に成った。

そして新春にはお互いに訪問し合う約束が良人達の話題にのぼった。毎日顔を合せている丈に、正式な御客様こっことは素晴らしい。

若夫婦二組にとつて、それがとても楽しい大きな一つの計画であった。お正月の夢はすっかり実現され、先づ我が家へ先に御招待する事と成った。

買い揃える種々の道具、中でも三つ組、かさね重、おと

つ私の昭和型と、純日本式の奥さんの明治型に、矢張り其の家、其の家の一つの味が新世帯同士乍ら、すでに家風と成つて流れている。

昨日と同じ型式で、先づおとそから初る。御主人の曰く、「私共の家庭で初めて買った金の壺です。ので、門倉さん御夫婦に飲んで頂き度い」と、床の間よりさつきの小さな壺を取り上げた。

家の子が其の金の壺でおとそを飲む時、矢張り「カチン」と音がした。

「囁むと、お壺に傷がつきますよ」と云われた。

「いやあ、金は万年ものですから」と云われた。

佐々木さんのお家では純金物を集める事にこり出した。此の小さな金の壺は、そのスタートだった。

其れより四十余年後の今日、矢張りそのまま続けられ、今や、大判・小判・古金の類が数々集められたという事を、何かの機会に知った時、昔を偲びなつかしく感じた。

門倉家の方は、先づ揃え始めたのが洋風家具。椅子・テーブル・子供用の椅子等々、家の中がせましく成る程買い込んだ。又、食物の方に使う事も惜しまず、胃袋は何時も充分に楽しませて居た。

月給取りは貯金せず「家の家風は出来たが、営業創立によつて尚一層その傾向は強くなった。

言葉は交つて、営業者が金を貯めたら営業が伸びない」と成りそれモットーにそれからは、家庭道具とはお別れしても、時代の事は何でも受け入れる家風に、妻としての私も変らず「亭主の好きな赤烏帽子」のまま遂に今日迄続いてしまった。

――未完―― (門倉くろ)